

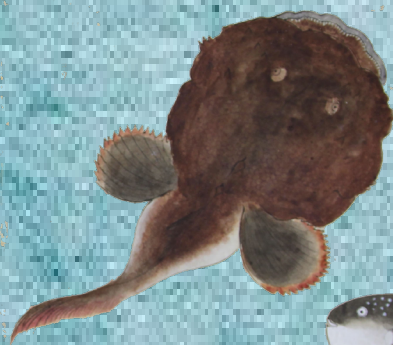
所蔵資料展示

書物にみる三重の海産

令和五年六月十三日（火）～八月十日（木）

三重大学情報教育・研究機構

情報ライブラリーセンター



-ごあいさつ-

国立大学法人三重大学と公益財団法人石水博物館は、学術連携・協力に関する協定書を2023年6月23日に締結します。これに関連し、三重大学情報ライブラリーセンター所蔵の貴重資料7点と公益財団法人石水博物館所蔵の貴重資料7点とをあわせた14点を資料展示「書物にみる三重の海産」として6月13日より8月10日まで公開することになりました。

石水博物館は、川喜田久太夫氏（号：半泥子）が1930年に地域文化の振興と社会福祉活動の拠点として設立した財団法人石水会館を母体としており、1975年に登録博物館となった後、2010年に公益財団法人に名称を変更、2011年5月に津市垂水の千歳山に移転開館しました。石水博物館の所蔵品は、江戸時代の伊勢商人の豪商・川喜田家の旧蔵資料を中心とした幅広い分野の資料を有したものです。

これまでに三重大学の教員は、こうした石水博物館所蔵の書冊・絵画や歴史史料の調査に携わるなど、石水博物館との間で多年に渡って連携活動を行ってきました。この度、協定書を締結することにより、相互の学術的・文化的・教育的活動がさらに推進されることが期待されます。

2023年6月24日から9月3日までの期間、石水博物館において、＜夏休み企画展＞「英雄伝説 ―博物館でヒーロー発見―」が開催されます。この展示には三重大学の学生6人が石水博物館所蔵の浮世絵について展示のための調査や解題執筆を行っています。

一方、三重大学情報ライブラリーセンターでの「書物にみる三重の海産」展では、石水博物館学芸員の桐田貴史氏が展示の企画協力と解題執筆を行ってくださいました。石水博物館より公開の8「魚譜」、9「河海并湖水魚ノ図」は京都の本草学者・山本亡羊の所蔵資料の写本で、江戸時代の本草学の水準を示すにふさわしい資料です。また、10「毛吹草」、11「伊勢路のしるべ」は伊勢の海産物が愛好されてきた歴史を示します。4「和漢三才図会」はクジラについて和漢の古典の引用のほか実地調査に基づく観察を加えた記述を行っています。13「三国地誌」は志摩国（志摩市）にクジラが多く観測されたことを示し、14「勇魚取図」は三輪崎組（和歌山県新宮市）の船団による捕鯨の様子を描きます。

三重大学所蔵の資料からも真珠や鮑、クジラなどが江戸時代からも三重の有名な海産物であったことがうかがえます。三重大学生物資源学部には海洋生物資源学科がありますがこうした海産で名高い三重の伝統が現代につながっているとさえいえるでしょう。

なお、本センター2階フロアでは、6月14日から8月24日まで、同じく「書物にみる三重の海産」および「石水博物館と伊勢商人の世界」をテーマとした一般書架の本を集めた展示を行っています。三重大学の司書課程の学生による展示です。こちらは本を手にとって御覧になれるほか、センター利用者に貸し出しも可能です。

今後、三重大学と石水博物館の連携事業を目にする機会が多くなることが期待されますが、協定書の締結による記念として今回の企画をお楽しみいただき、末永く記憶していただければ幸いです。

2023年6月 三重大学情報ライブラリーセンター長 吉岡 基

-書物にみる三重の海産-

【展示凡例】

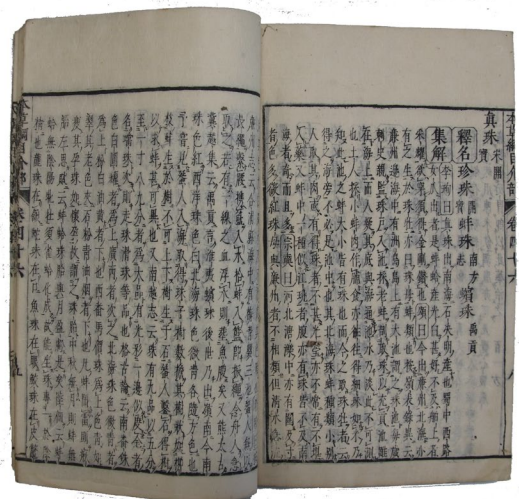
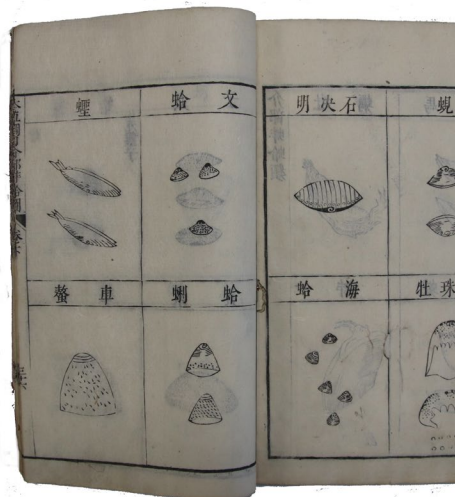
書名、読み（ひらがな）、ジャンル、整版・写本・活版、大きさ縦×横センチ、巻冊数、編著者名、序跋者、刊行・成立年、（出版地）版元、旧所蔵元、現所蔵者、三重大学の架蔵番号の順で記述。

1、本草綱目 ほんどうこうもく

本草、整版、26.8cm×17.3cm、52巻・図巻3巻・奇経八脉1巻24冊、編著者名資料に記載なし、王世貞序（1590）・夏良心序（1603）・長鼎思序（1603）、刊年不明、三重高等農林学校図書館旧蔵・三重大学情報ライブラリーセンター所蔵、499.9/R32/1-7。

中国明代に成立した百科全書的性格を有する本草書であり、初版は万暦24年（1596）に刊行された。著者の李時珍は、当時の主要な古典籍の参照に加えて自ら各地に赴き、民間療法の調査や薬物の標本収集を行い、その成果を以って本作を著した。従来の本草書で見られたような薬物を上・中・下に分ける三品分類ではなく、自然物の種類によって分類配列した点、解説に釈名・集解・正誤・修治・気味・主治・発明・附方の八項目を設けた点が画期的であり、当時の中国における本草学の集大成と評される。

日本へは慶長12年（1607）に伝来したとされ、徳川家康の侍講を務めた朱子学者・林羅山は長崎で本書を入手し、幕府に献上した。以降、『本草綱目』の内容及び実地調査を基礎とする李時珍の研究姿勢は江戸時代の本草学者に多大な影響を与え、日本独自の本草学が発展する土台を築いた。（塩田奈実）



2、本草綱目啓蒙 ほんぞうこうもくけいもう

本草、整版、25.5cm×17.2 cm、48 巻 27 冊、小野蘭山口授、丹波元簡序（享和 2 年（1802））武田信任書・淡海源樸揮撰後序（文化 2 年（1805））武田仁景欧書、文化 8 年重刻・文政 12 年（1829）再版、衆芳軒蔵梓・書林日本橋通 2 丁目山城屋佐兵衛・書林神田鍛冶町 2 丁目北島順四郎・書林神田鍛冶町 2 丁目須原屋善五郎版、三重高等農林学校図書館旧蔵・三重大学情報ライブラリーセンター所蔵、499.9/067。

著者の小野蘭山は享保 14 年（1729）に京都に生まれた。25 歳で私塾・衆芳軒を構え、寛政 11 年（1799）には幕府から江戸の医学館に医官として招聘された。実地調査を重視し、多くの後進を育成した、当時を代表する本草学者の一人である。

本書は蘭山の『本草綱目』についての講義録『本草綱目紀聞』を孫の小野職孝が整理したものであり、初版は享和 3 年（1803）から約 3 年をかけて出版された。蘭山が長年にわたって得た数多の文献の知識と、実地調査の成果がまとめられた、日本の伝統的本草学の集大成とも評される百科事典的本草書である。文化 3 年（1806）の江戸の大火など、火災により版木を焼失する事態に直面するが、その後重刻・再出版され、以後の日本における本草学の普及と発展に貢献した。

分類配列は『本草綱目』に従うが、和漢問わず多数の古典籍を引用し、蘭山の自説も加えられているほか、各薬物の項目には名称・異名・産地・形状・利用などが詳細に解説される。中でも特筆すべき点は各薬物名に日本各地の方言を収録していることである。そのため本草学のみならず、植物学、言語学、さらには民俗学の分野にも多大な影響を与えることとなった。

展示は真珠の解説部分である。伊勢が真珠の産地として広く知られていたことが窺えるほか、真珠の形や色、あるいは地域によって呼称が異なったことが読みとれる。（塩田）



3、大和本草 やまとほんぞう

本草、整版、22.3 cm×16 cm、16 巻・付録 2 巻・諸品図巻 3 巻 19 冊、貝原益軒、崔原韜序（宝永 5 年（1708））・貝原篤信（貝原益軒）自序（宝永 5 年）、宝永 6 年刊・諸品図巻正徳 5 年（1715）刊、皇都書林永田調兵衛版、三重高等農林学校図書館旧蔵・三重大学情報ライブラリーセンター所蔵、499.9/Ka21。

中国の本草書を日本において医学・薬学書として利用するにあたり、日本の本草学者たちの第一の研究目標は中国名で記載された薬物を日本のものと同定することであった。そうした中で日本に合わせた薬物の知識が必要とされるようになっていった。

貝原益軒は『本草綱目』に記載のない種が日本に存在することに着目し、一般に広く知らしめる目的から『大和本草』の編纂に着手した。本書は日本の本草学が中国の本草学を離れて自立し、独自に発展してゆく原点となった、日本人による最初の本格的な本草書と位置付けられる。

展示箇所にはヤガラ、アジ、クジラの項目が見え、クジラの漁で使用される道具が弓から鉾へと変遷したこと、アジは夏から秋にかけてのものが肉厚で美味であることなどが記されている。展示箇所にも見られるように、日本における啓蒙を意図したことから漢文でなく和文で、また益軒自身の観察調査に基づいた記述になっていることが、本書の特徴の一つである。（塩田）



4、和漢三才図会 わかんさんさいずえ

事典、整版、縦 27.0×横 18.1 cm、107 巻 81 冊、寺島良安編、藤原信篤（林信篤）序（正徳 3 年（1713）3 月）・和氣伯雄甫序（正徳 3 年）・自序（正徳 2 年）・洛下臥雲閣主跋（正徳 5 年）、刊行不明、岡田三郎右衛門・鳥飼市兵衛・渋谷清右衛門・松村九兵衛・大野木市兵衛版、石水博物館蔵。

正徳から享保にかけて刊行された、図解入りの百科事典である。大坂の医師であった寺島良安が師・和氣仲安の「天地人を知って医術は生かせる」という教えに従い、明の王圻が編んだ『三才図会』に倣って約 30 年をかけて編纂した。

本書に収録された薬物は天・人・地の三才の大部と、そこからさらに96類に分類されている。展示箇所はクジラの項目が収録された部分であり、ここに見られるように、各項目は基本的に図、漢・和の名称、解説という構成になっている。図のヒレの部分や解説の「海中大魚」という記述からは編纂当時、鯨が魚の一種と捉えられていたことが窺える。中国や日本の古典を引用



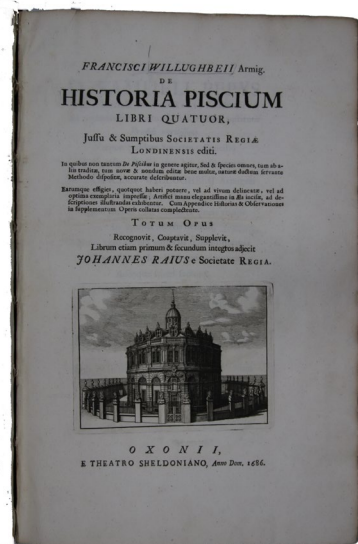
しつつ、薬物の種類・製法・用途・薬効などが漢文で解説されるが、それらは国内の実地調査に基づく客観的かつ合理的なものであり、刊行より明治時代に至るまで広く実用された。(塩田)

5、Willughbei *Histroria Piscium* (ウィラビィの魚の歴史)

ういらびいのさかなのれきし

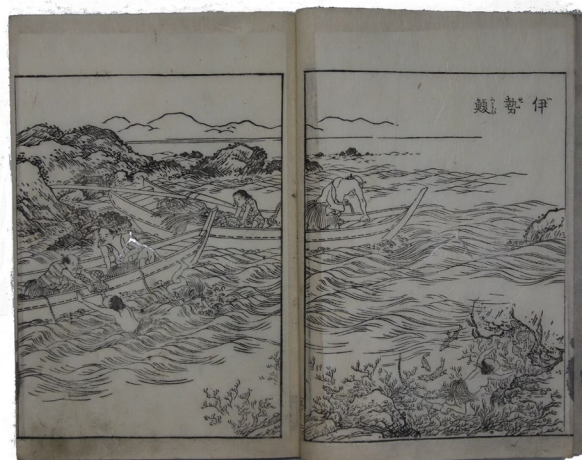
動物学、活版、39.7cm×26.5cm、1冊、Francis Willughby(フランシス・ウィラビィ)著、1686年刊、(オックスフォード)王立協会、三重大学情報ライブラリーセンター所蔵、487.5/W74h。

内題は“*De HISTRIA PISCIIUM*”(魚の歴史) イギリスの博物学者フランシス・ウィラビィ(1635-72)の遺稿を友人のジョン・レイ(1627-1705)がまとめて、ウィラビィの名前で出版したもの。活字でラテン語を記し、絵は銅版画である。ジョン・レイは「イギリスの博物学の父」とも呼ばれる植物学・動物学の学者だった。本書の三重大学への伝来は不明。(吉丸雄哉)



6、日本山海名産図会 にっぽんさんかいめいさんずえ

物産、整版本、26.1cm×18.2cm、五巻五冊、平瀬輔世（徹斎）編、蔀閑月画、木邨孔恭（木村蒹葭堂）序（寛政10年（1798））・なには江のみち跋（寛政10年）、（大坂）高木遷喬堂・塩屋長兵衛版、寛政11年刊、三重県師範学校旧蔵、三重大学情報ライブラリーセンター所蔵、602.1/N 77。



日本各地の諸産業や物産を記した『日本山海名物図会』（宝暦4年（1754）刊）の続編に相当する。三重関係では、香蕈（しいたけ）・熊野石耳（いわたけ）・熊野蜂蜜（巻2）、伊勢鰻（あわび）・真珠・伊勢海老（巻3）や桑名蛤（巻4）が収録されている。本書は水産が多くの紙数を占める。展示箇所は「伊勢鰻」で江戸時代の海女漁を描いたもので、「長鮑制（のしをせいす）」画とあわせて伊勢で鮑漁と鮑熨斗（のし）の生産が盛んであったことがわかる。（吉丸）

7、[魚類図] ギョリイヅ

魚介、写、1軸、縦27糎×全長329糎、書写者不明、成立年不明、三重大学情報ライブラリーセンター所蔵、489/094/5168。

江戸時代に作成されたであろう魚類の図。題簽、署名、識語などなく詳細は不明。タイトルは仮題。絵柄や色調は飯沼慾斎『本草図譜』10巻「魚部」に似る。解説は『大和本草』や方言辞典『物類称呼』（1775）などを参考にしたか。19世紀以降の成立と思われる。冒頭よりトラフグ・アンコウ・ハタ・ヒラマサ・靴底魚（舌ヒラメ）・アカトビ（オコゼ）・クモダコ・カワイワシ・シマエビ・アマダイ・ハラカ・カガミダイ・カワハギ・トビウオ・クルマタイ・ヤナキノマイ・赤メバル・名称不明魚2種が収録される。（吉丸）

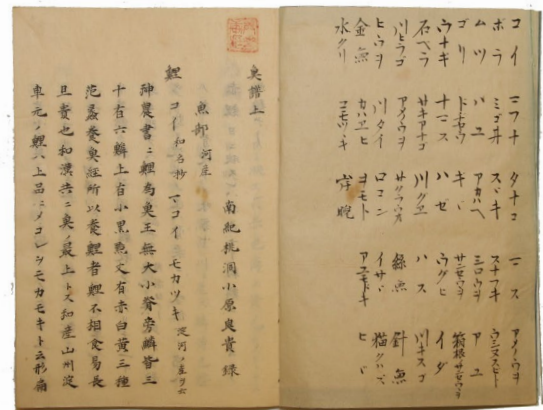


8. 魚譜 ぎよふ

魚介、写本、縦 23.1 cm×横 16.4 cm、3 巻 3 冊、小原良貴著、成立年代不明（江戸時代後期）、弘化 3 年（1846）写、平安読書室所蔵本の転写本。石水博物館蔵。

本書を著した小原良貴（号は桃洞）は、江戸時代後期に活躍した紀州藩（現在の和歌山県と三重県の一部）の本草学者。京都で小野蘭山に本草学を学んだ。本書は淡水魚・海水魚に関する小原の所見をまとめた著作である。展示箇所のコイに関する項目には、「山州淀車元ノ鯉ハ上品ニシテ、コレヲモカモキト云」と記すなど、紀州藩領周辺の情報は実見に基づいたと考えられる記述も数多い。

本書は当時、京都の本草学者である山本亡羊（ぼうよう）が主催していた私塾・平安読書室の蔵書を転写したもの。弘化 3 年（1846）に川喜田石水（せきすい）が、山本榕室（亡羊の次男）へ金 25 匁 8 分で写本の作成を依頼し、京都で書写された。石水は天保 15 年（1844）頃に平安読書室へ入門し、津で物産会（ぶっさんえ）を何度も催すなど、本草学に関心が深い豪商であった。（桐田貴史）



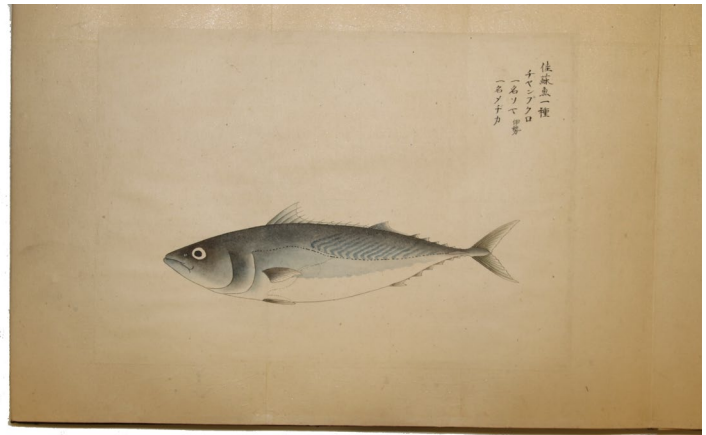
9. 河海并湖水魚ノ図 かかいならびにこすいうおのず

魚介、写本、縦 36.5 cm×横 52.3 cm、1 帖、山本溪山筆、嘉永 7 年（1854）頃、石水博物館蔵。

幕末の平安読書室は、榕室など亡羊の子らによって運営されていたが、本帖の筆者である溪山は亡羊の六男に当たる。本帖は書名の通り、淡水魚・海水魚を描いた図譜であるが、一見して明らかなように、その描写は繊細かつ細密を極める。

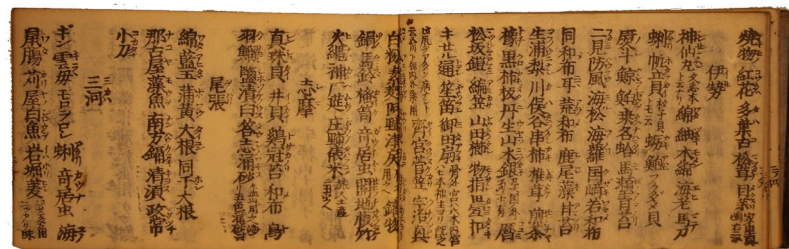
こうした作風は、動植物のあり様をそのままに写し取ろうとする、溪山の学問的な姿勢によることは間違いない。その一方で、溪山が写生を重視する四条派の絵師・森徹山（もりてつざん）に学んでいる点も見逃せない。各魚類の特徴を的確に捉え、丁寧に仕上げられた本帖は、江戸時代後期の京都画壇と本草学との関係を考える上でも、重要な作品である。

さて、展示箇所では溪山は、京都でカツオと称される魚として、右方にはサバ（溪山はカツオと表記）を、左方にはソウダガツオを描いている。ソウダガツオが伊勢で「ソマ」と称されると記しているのは、発注者である川喜田家への配慮であろう。（桐田）



10、毛吹草 けふきくさ

俳諧、整版、縦 13.2cm×横 20.3cm、5 巻 4 冊、松江重頼編、自序（寛文 2 年（1662））、刊年不明、石水博物館蔵。



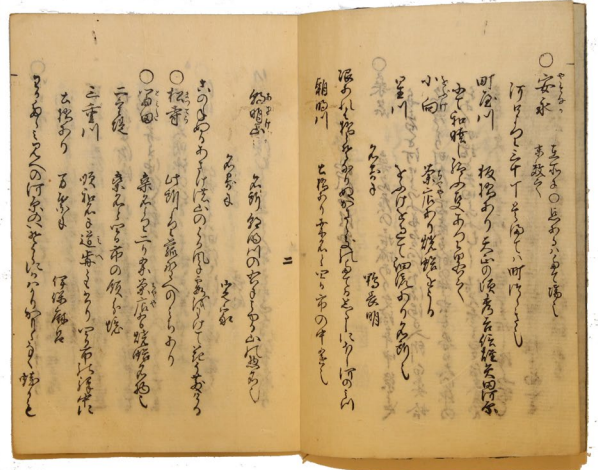
江戸時代前期の俳諧作法書である。編者の松江重頼は松永貞徳の門人であり、本書も貞門俳諧の方式に則っている。重頼独自の論も含まれており当時は「異端の書」と扱われたが、版を重ねながら長く盛んに参照され続け、今日では代表的な貞門俳諧書のひとつに数えられている。7 巻 5 冊構成が一般的だが、石水本は巻六・七が省略されて 5 巻 4 冊構成となっており珍しい。刊年は不明だが、かなりの後印本だと考えられる。

展示箇所を含む巻四では俳諧に読まれる諸国の名産を国別に列挙する。巻二後半の俚諺集と合わせて、語彙蒐集に対する重頼の貪欲な姿勢が表れている。展示の丁は巻四の中でも「伊勢」「志摩」にあたる箇所である。海藻類や貝類が多く挙げられており、俳諧文学の中でも伊勢・志摩の名産として海産物が大きな存在であったことがうかがえる。（大久保日南子）

11、伊勢路のしるべ いせじのしるべ

地誌、整版、縦20.8cm×横14.8cm、1巻1冊、石崎文雅著、自序（寛延3年（1750））、刊年不明、石水博物館蔵。

伊勢参りの旅人のための案内書。伊勢国の玄関口であった桑名から参宮街道を通して神宮に至る道のりと神宮周辺の案内がある他、部田（現在の津市）から伊勢別街道へ入り、関（現在の亀山市）より東海道へ戻る道のりも記されている。著者の石崎文雅は国学者・漢学者であったが、代々伊勢神宮外宮祠官の代官を職とする家に生まれており、神宮と深い縁を持つ。本文では、目印となる茶屋や石標を紹介するのに加え、その地が詠まれる和歌を併せて記載する。「万葉に」などと和歌の引用元を明記しており、国学者である著者の知識分野と学問に対する誠実な姿勢が窺える。



展示箇所はスタート地点の桑名からほど近い、安永から富田を記す丁である。「焼蛤」が食べられる茶屋の情報が複数見られる。桑名の漁場である木曽川・揖斐川河口で採れる蛤は質が良く、古代から現在に至るまで桑名の名産品として名高い。当時の参宮客にとって、「桑名の焼蛤」を食べることも旅の醍醐味となっていたのだろう。（大久保）

12、神都名勝誌 しんとめいしょうし

地誌、整版、縦26.2cm×横18.8cm、6巻7冊、東吉貞編、松岡康毅序・鹿島則文序（明治28年（1895））、岡部譲跋・自跋、明治28年刊、（東京）吉川半七・他8軒版、三重県師範学校旧蔵・三重大学ライブラリーセンター所蔵、092.91/J52/1-6。



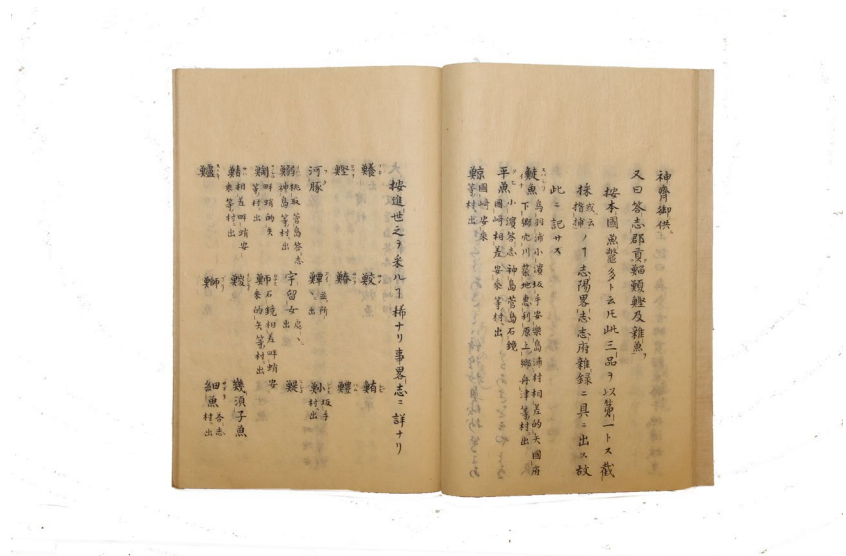
参宮客が神宮周辺を巡る際に役立つよう編纂された地誌である。参宮客を対象としている点では 11『伊勢路のしるべ』と似ているが、内容は伝承や歴史、地理的情報などその土地に関する詳説が主で、道案内的性格は薄い。また、編者の東吉貞をはじめ校訂、序跋者など編纂に関わった者は皆当時現役の伊勢神宮関係者である。凡例によると信頼できる資料のみを参照することを心がけており、精度の高い地誌を目指す姿勢が見える。

展示箇所では今一色（現在の伊勢市二見町）で盛んに使われていた漁具「鵜縄」を解説している。漁具の仕様から使い方まで詳細に記す。鵜縄漁のターゲットであったボラは内湾や汽水に好んで生息し、伊勢湾に面する伊勢・志摩地域でよく捕れた。10 人の男が息を合わせて鵜縄を操る様子が細やかに描かれている。（大久保）

13. 三国地誌 さんごくちし

地誌、写本、縦 27.0 cm×横 18.5 cm、111 巻 82 冊、藤堂元甫修著、自序・奥田三角跋 宝暦 13 年（1763）成立、石水博物館蔵。

藤堂藩では、伊賀上野城代の藤堂元甫が伊勢・伊賀・志摩の地誌編纂を開始し、その養子の藤堂元福が宝暦 13 年（1763）、『三国地誌』として完成させた。111 巻にも及ぶ浩瀚な地誌である。本書が、現在の三重県域に相当する地域を対象としている点も、藤堂藩の意識を考える上で興味深い。



展示するのは、志摩国答志郡（現在の三重県志摩市）の地誌（巻第 88）と、本書に付帯する「志州海錯略図」と題された志摩国で採れた海洋生物の図譜である。本書によれば、「国崎・安乗」といった地域にクジラが出没したという。このほか、英虞郡の「片田・船越・波切」といった地域でもクジラが確認されたとあり（巻第 91）、18 世紀の志摩国でクジラが多く観測されたことが知られる。

「志州海錯略図」には展示している「児鯨」のほか、大小さまざまなクジラが色彩豊かに描き分けられている。（桐田）



14. 勇魚取図 いさなとりず

魚介、卷子本、上巻：縦 32.7 cm×横 342.3 cm、下巻：縦 32.7 cm×横 221.8 cm、上下 2 巻、川喜田石水注記、成立年代不明（江戸時代後期）、石水博物館蔵。

上巻には、展示箇所のシロナガスクジラをはじめとするクジラやシャチの図が、分類や生態とともに多数収載される。下巻も含め、注記をほどこしているのは、その筆跡から川喜田石水と考えられる。おそらく、No.8 の解説で触れた本草学への関心から、作成された卷子であろう。

下巻には、勇魚取（いさなとり）すなわち江戸時代後期の捕鯨の様子が描かれる。三輪崎組（現在の和歌山県新宮市）が船団 14 艘を主軸としてセミクジラを狙う。巻頭の注記によれば、太地組（現在の和歌山県太地町）にも網舟・勢子舟の出帆を依頼したという。それを証するように、セミクジラのすぐそばに太地組の舟が描かれ、「鯨往生前之目利」、つまりセミクジラが死に至ったか否か、判断する役割を担った。

セミクジラが暴れ波打つ水面、息を合わせて必死にクジラを取り巻く舟の数々、その背に乗り移る漁師。太平洋の大海原で展開される命のやりとりに目を奪われる。（桐田）



編集後記

本展示の企画・制作は、本情報ライブラリーセンター研究開発室兼務教員の人文学部吉丸雄哉教授と公益財団法人石水博物館桐田貴史学芸員が行いました。解説・解題執筆は吉丸雄哉教授と桐田貴史学芸員、および人文社会科学研究科大学院学生の塩田奈実、人文学部文化学科の大久保日南子が行いました。展示品は情報ライブラリーセンターと石水博物館の所蔵品です。

■参考文献一覧■

- 石原義剛監修『鯨者六鯨ト申候』、海の博物館、2011、開架 664.9/Ku25。
- 伊藤恭子編著『江戸のくすりハンター小野蘭山-採薬を重視した本草学者がめざしたもの-』内藤記念くすり博物館、2012。
- 加藤定彦「初印本『毛吹草』考」立教大学一般教育部『立教大学研究報告〈人文科学〉』45号 pp.1-17、1986、和雑誌・大学紀要。
- 小玉道明「伊勢商人川喜田政明の本草物産」『三重の古文化』108、2023。
- 近藤奎・平岡潤編纂『桑名市史本編 第3版』桑名市教育委員会、1987、開架 092.22/Ku97。
- 新村出校閲・竹内若校訂『毛吹草』岩波文庫、1943、書庫 911.31/Ma76。
- 杉本つとむ『江戸の博物学者たち』講談社、2006。
- 早川由美「山本読書室と石水博物館—山本読書室関連資料を読む—」（岡本聡編『石水博物館館蔵資料を中心とした伊勢商人の文化サロンに関する総合的研究』科研費成果報告書、2022）。
- 早川由美「平安読書室山本榕室の書物意識 川喜田石水等伊勢門人宛書簡を中心に」『叙説』第50号、2023。
- 真下正太郎『溪愚山本章夫先生小伝』山本読書室年祭委員会、1922。
- 松田清『京の学塾 山本読書室の世界』京都新聞出版センター、2019。
- M.H「貴重書について」『学塔』99号、三重大学附属図書館、1998・3。
- 武藤善一郎『伊勢路に道しるべを訪ねて』サンライズ出版、2004、開架 682.156/Mu93。
- 『日本人名大辞典』講談社、2001、開架・参考図書 281.033/Ko19。
- 『日本古典文学大辞典』岩波書店、1984、人・日本語日本文学 910.33/N77/1-6。
- 『食材魚貝大百科』平凡社、1999-2000、書庫 664.6/Sh96/1-4。
- 以下はジャパンナレッジ版（<https://japanknowledge.com/library/>）を使用。
- 『国史大辞典』吉川弘文館、1979-1997。
- 『新釈漢文大系』明治書院、1960-2018。
- 『日本大百科全書（ニッポニカ）』小学館、1984-1994。
- 西尾市岩瀬文庫古典籍書誌データベース（日本山海名産図会について。参照 2023.5.23）
<https://adeac.jp/iwasebunko/top/>

*アンケートにご協力をお願いします。



